

航空

満州より比島へ

生きて帰れた航空整備員

福井県 三 屋 清 治

僕達の青春は何と言っても軍事一色の時代でした。目に付くものは全て儉約・配給・統制下で、品物の不足している中で、工夫次第で何とか生活が出来た時代でした。小学校に入っても、毎日毎日出征兵士の見送りでした。

支那事変のニュース、戦勝の話、町には産めよ増やせよ増産だ、男なら飛行兵、女なら赤十字の看護婦といった看板が目につき、学校では募集の張り紙があ

り、いやが上にも戦時一色の時代でした。

僕も卒業と同時に飛行機関係の軍隊に入隊し、初めて見る飛行機に感動し、胸の鼓動を覚え、「ヨーン、今に見ておれ」という躍動感が湧きましたが、軍隊という所はそんな甘いものではありませんでした。

朝は起床ラッパで起こされ、点呼、食事と一秒の余裕もない生活をして消灯ラッパで寝るのですが、夢に内地での思い出などが出たかと思う間もなく深い眠りにつきます。学生時代に空想していた軍隊とは全く掛け離れた所で毎日教練、学科等で、飛行機は空で我々は地面という所で基礎作りをしているうちに自然と軍人精神が身に付いてくるのが分かるようになります。

四月十一日に一〇〇人ほどが同期で入隊し、一応基礎教育が終わり、八月十日付をもって杏樹第八三二三部隊に二十八人が転属し、僕も機体整備の部署に配属になり、上司並び班長、古参に申告を済ませました。

これからの個人の実力を発揮する場所と思いい、気合を入れて修理整備に励んで参りましたが、一年ほどで杏樹第八三二三部隊は閉鎖されることになりました。

我等隊員は補給廠並びに分廠等に散り散りに分散し、同期は五人になってしまい、後の者はどこへ行っただか分かりませんが、約半年後また転属し、比島で第一独立整備隊として発足し、その隊員になり、教育を一カ月ほどして貨物列車にて一路戦場（南方）へと旅立ちました。

その間の状況について少し重複しますが書いてみます。本廠で一応の教育が終わり、訓練を積みながら転属となり、また移動して飛行機の整備修理に励んでおりました。しかし、肝心の飛行機がだんだん少なくなり、第三十三飛行戦隊の隣の第七十五戦隊も南方へ進出しました。飛行機も、訓練用の練習機が少し飛んで

いる状態ですから整備の仕事もあまりありませんでした。

その時に、急ぎよ転属命令が下り、転属したところは第一独立整備隊でした。編入して一カ月ほど、海上での避難及び防空の訓練をして、一路、戦場であるフィリピンへと出発しました。しかし当時、海の状態はますます悪く、危険なことこのうえありませんでした。

予感の通り、台湾とフィリピンの間のパシー海峡（当時、魔の、パシー海峡と呼ばれ、多くの艦船が敵潜水艦による魚雷攻撃を受け、十二時間ほど、海に漂い、海軍の駆逐艇に助けられました。一命を落とすところでした。

初めて遭う戦争の怖さは想像以上で、覚悟はしていましたがやはり恐怖そのものでした。しかし、いつまでもそんなことを思っではいけない。この戦争を承知で、覚悟して志願をした我々が、弱音を吐くことは出来ない、大和魂があります。それを軍隊で訓練して、

「何物にも恐れず」「何物にも怖がらず」の精神、それが「大和魂」です。

それを我が身に言い聞かせ、また、我が身を慰め奮い立たせて、これからの軍務生活をしようと思ひ、心を入れ替えていた時、着いた所がマニラ兵站でした。

一応と身支度を整えておりましたところ「我が隊長以下四十三人が戦と共に戦死した」という知らせがあり、愕然としました。残りの八十三人を、川西准尉が指揮を取ることになり、「情勢が良くなるまで、ルソン島のクラーク基地の威第一五三一部隊で待機せよ」の命令を受け、昭和十九（一九四四）年八月七日に、クラーク基地の同部隊に着任しました。

初めて見る南方は見る物、食べる物、珍しい物ばかりで本当に幸せでした。軍隊も楽しい生活が一カ月ほどで艦載機グラマンが大学空襲に飛来し格納庫および滑走路、兵舎等が焼け、見るも無残な姿でした。三日間ほど空襲が続き、今までの基地とは一変して基地機能は三分の一以下に低下し、補修しながら使用しました。

今までは変わり、飛行機も少なく台湾からの飛行中継基地的存在の基地のようになりました。十月頃から毎日のような空襲・爆撃で整備する飛行機もなく、昼は防空壕で待機し、夜は山裾で寝ることの繰り返しで、武器は竹やりで、ほかに何もありません。直接戦闘員でないので武器弾薬等はないのです。

日がたつにつれ兵隊の数がだんだんと減り、十月中旬に一部空輸で第一独立整備隊がバナイ島に移動し、レイテ作戦に参加し、隣のネグロス島には第二独立整備隊が移動し行動しております。私はクラークに残留し、その部隊に編入されて、昭和二十年一月五日まで山麓にいて部隊編成を行い上等兵勤務を命ぜられ、翌日五人で山の生活に入りました。しかし米兵が攻めてくるため山の奥へ奥へと逃げなければならず、持っている品物を少しずつ置いては逃げ、置いては逃げ、一カ月ほどすると食うものが全然なくなり、体力も無く気力も無くなり、それに南方特有のスコールが毎日降り、食うに食が無く、寝るに床が無くなり、本当に死を待つ生活でした。

二月十三日頃、「部隊解散」という知らせがあり、他の友軍の世話になるより他に方法がありません。解散はしたものの、他の部隊にしても、他の隊の面倒を見る余裕などある訳がなく、ただ自分で自分を守る以外何も無い。病氣・けが・体力等の無い者から順にこの世から去り、死体が一〇〇メートルくらいの列をなしているのが、山の中にたくさんありました。今この有様を思い出しても無念でなりません。「心やすらかに」と、念仏を唱える以外ありません。

我々は毎日何をするともなく、ただ山の中を歩き、生きて、「日本軍再攻撃を待つために生きなければ」の思いだけで、食糧探しが毎日の生活でした。マッチも塩も何も無くなり、食べるものはすべて、生そのものです。デンデン虫からヘビ、オタマジャクシ、蛙、やわらかそうな草、または根、茎などです。このような生活ですから体力が無くなり、また病気がなごしたら、そのまま他国の土と化し、哀れな姿で本当にかわいそうです。しかし自分自身もいつそうなるか分からず、本当に怖い暮らしの日々でした。

我々も五人で生活しておりましたが、途中二人が亡くなり、三人で山麓までたどり着いたところで別れ、その後の彼らの消息は今も分かりません。

話を少し戻しますが、部隊を解散するから友軍の部隊に世話になればと命令されても、どの部隊でも同じで、生きて行くのが精いっぱい、人の面倒等とても見る余裕がありません。敵から離れるため山深く入り込むと寒いのと、雨が降るので体力が衰え、食う物も無く、ただ死を待つしかありません。そして、誰も知らないところに屍をさらすのは、先に記したとおりです。

思えば、家を出る時は「勝つて来ると勇ましく」と言つて来た若人が餓死するなんて、なんと情けない姿でしょう、戦わずして死ぬなんて、でも、これが戦争というものかもしれない、本当に残酷なものです。二カ月あまり、山の中で放浪生活をしているうちに丘に出てしまい、山麓をうろついている所を土民に見つかり、一時間ほどしたら土民達が二〇〜三〇人ほど

来て、僕を木に縛りくくり付けてしまいました。二十分ほどしたら米兵が来てジープに乗せられ、着いた所が元いたアンヘレスの憲兵隊です。そこで軽い食事をもらい、二時間ほどして南サンヘルナンドの刑務所で、熊かライオンでも入れられるような所に入れられました。これは本当に心細かったですが、捕虜という身分なので覚悟は出来ていました。

その時の日時は、昭和二十年四月二十七日で、何と情けない日本男児と思ひ、悲しい自分が嫌になりました。五日ほどして、捕虜収容所のあるマニラに行き捕虜番号が二〇〇〇〇あまりの数字でした。

すぐ病院へ入り、二十日ほどで退院し、若い我々を集めて医学の教育に二世が通訳し、即席の看護兵を一カ月ほどで作り上げ、僕達は毎日、看病に専念しました。しかし、名前も分からず一日三日で死んでいく兵隊も数多く、本当にかわいそうでした。

看護をしつつ、十二月二十五日になったその時、突然に帰還命令が出て、翌日マニラから船に乗って一路日本に帰還しました。

久しぶりに見る故郷に涙が込み上げ、船は浦賀港に入り、引揚援護局に一日おり、翌日、我が家に三年ぶりに帰ってきました。

昭和十七年四月十一日に入隊し、昭和二十一年一月八日に日本の土を踏み感無量でした。

満州から比島転進までの軍歴の概要は次のとおりです。

昭和十七年四月十一日

満州三江省桂木斯 第八三五部隊南隊に入隊

同年八月十日

東安省杏樹 第八三三部隊に転属

昭和十八年九月一日

三江省老連 第八三一四部隊に転属

昭和十九年五月一日

三江省蒙古 力第八三一九部隊に転属

第一独立整備隊（館野隊）を編成入隊

同年六月十日

貨車にて一路南方へ

同年同月二十二日

大阪商船「扶桑丸」に乗船、二十二隻の船団にて

出帆

同年同月二十四日

台湾、高雄港着

同年同月二十七日

同港 出帆

同年同月三十一日

午前四時三十分頃魚雷攻撃で沈没（バシー海峡）

午後五時頃、海軍駆逐艇に救助される

同年八月一日

フィリピン、ルソン島、アバソに上陸

同年同月四日

リンガエン湾に漁船にて上陸し、汽車にてマニラ

兵站からクラーク飛行場基地に配属（威一五三一

一部隊）、隊長以下四十人ほどが船と共に戦死し

た。

同年九月十三日

フィリピン全土が大空襲で兵舎格納庫全焼、三日

ほど毎日連続の空襲

同年十月十二日

一部を残してパナイ島に移転（空輸重爆機にて）

同年十二月十日頃より

クラーク基地は海軍が使用し、陸軍はアンヘレス

基地を使用、爆撃は毎日昼、夜の区別無く行い、

生きた心地は無かった。

昭和二十年一月五日頃

兵隊も段々少なくなり、上等兵勤務を命ぜられ山

中生活が始まる

同年二月頃

食料は全然なく草の根、茎などを食べた。カタツ

ムリは大のごちそうだったが、一日中探しても一

匹も捕れない。各部隊が山中生活の為に食い尽く

し、カエル、ミミズ、オタマジャクシ、ヘビ等食

えるものなら何でも食う生活だから病氣・けが等

の体力無き人からこの世を去って行く。列を作っ

て死んでいるところたくさんあり、我々もそれに

近い体力で、明日とも分からない体力しか無かった。

同年同月十五日頃

部隊解散、各自山中で放浪生活、現地人に捕らわれ、米軍の捕虜となる

同年十二月二十五日

帰国命令、神奈川県浦賀へ入港、引揚援護局で復員

昭和二十一年一月十一日

三年ぶりに帰宅す

思い出と忠霊碑

満州での軍隊生活は一般の基礎訓練で、実戦とは程遠い教えということが分かりました。物量を誇る連合国軍とでは子供と大人ほどの違いで、一、二発の弾を撃てば五十発ぐらいのお返しがあり、とても話になりません。だから弾を撃たなくなると共に返し弾によって損害が大きく、整備隊は戦闘隊ではないので安全な山の中へ避難という命令で、戦闘部隊より早く山の生

活をすることになりました。

以後は前述したように、僕は捕虜となり病院勤務になりましたが、本当に気楽な生活で病気を治療することだけを考えていれば良いので本当に楽でした。

米陸軍一七四野戦病院です。せっかく病院までたり着いたが力尽きてこの世を去った戦友の名も分からず、フィリピンの土と化した白い墓標が何百ともあり、安らかに戦友よ眠りたまえ、貴殿たちのお陰で我々が平和な毎日を過ごせることを感謝しますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

この戦争を思う度に今も心が痛み、目に涙が溢れ、胸に込み上げてきます。君達よ、この平和な日本をいつも、いつまでも見守って下さい。安らかに……念仏。

フィリピンは日本の興亡を賭けた戦いであると共に、多くの戦死者並びに戦傷者が出ました。終戦時で生存者は約九〇、〇〇〇人ほどで一割の生存です。陸、海軍合計で八五〇、〇〇〇人ほどがフィリピン戦

に参加し、尊い命が亡くなり、大変な戦いでした。

しかし今、貴君達の霊を慰め、じつと南の方角を見つめ安らかにと観音様が愛知県蒲郡市三ヶ山に安置され、たくさんのお忠霊碑に囲まれ、我が子を見つめるような優しい顔つきで安置されています。三ヶ山から見るとマニラ湾によく風景が似ています。

第一独立整備隊

第十野戦航空修理廠の忠霊碑

—慰霊の碑 碑文—

満州杏樹ニテ航空機整備碑島派遣隊館野隊長以下
一二五名編成昭和十九年六月十四日出発 バシ

海峡ルソン島バナイ島ニ転戦勇猛果敢屍乗越奮戦

隊長外九十余名ノ尊キ御霊ノ冥福ヲ祈リ建立ス

生存者有志

○ 一七四会

(米陸軍第一七四野戦陸軍病院の日本人勤務者、
看護兵等の生き残りが建立した)

—碑 文—

戦後比島収容所にて斃れし英霊に捧ぐ

いのちありて

山をくだれる

戦友なりき

あわれ幾千の

白き墓標は

一七四会